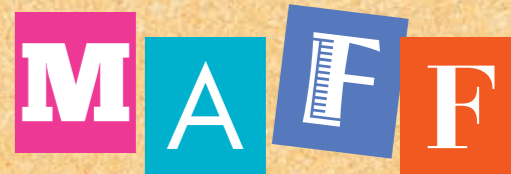


上) IT技術により、自動化された栽培システムのパブリカの施設園芸を見学する林農林水産大臣
 下) 作業の機械化が進んだ、コチョコウランの農場



オランダの大規模化された園芸施設。国内5か所に生産者、研究機関、関連企業などが集まるグリーンポートと呼ばれるクラスター（集団）が形成されている

モデルは、オランダの施設園芸よ



TOPICS

文/橋本 潤

産・学・官が、がっちり連携!

次世代施設園芸のプロジェクト
 日本各地で始動中!

農林水産省が推進する「攻めの農林水産業」を象徴する取り組みのひとつが、次世代施設園芸です。徹底したコンピュータ管理や施設の大規模化、バイオマスなどの地域資源の活用といった、一步先を行く施設園芸を目指すプロジェクトで、今、全国各地で拠点整備が進んでいます。

日本の実情に合った
 先進的システムの構築を目指して

施設園芸は農産物の安定的な生産に欠かせないものですが、日本では、ビニールハウスのような簡易な設備を導入して行うものが多くを占めています。

しかし、ヨーロッパなど海外の農業が盛んな国々では、さらに先進的なシステムを構築して施設園芸を行い、成功を収めています。とくにオランダは、九州とほぼ同じ国土面積であるにも関わらず、アメリカに次ぐ世界第2位の農産物の輸出額を誇っています。

昨年5月、オランダの施設園

芸団地を視察した林農林水産大臣は「進歩した施設園芸を目的の当りにすることができました。オランダと日本では気象条件も違うので、ノウハウをそのまま持ってくることはできませんが、学ぶところは大きいにありましたね」と語りました。

オランダの施設園芸では、生産者、研究機関、関連企業が強に連携しています。生産だけでなく、労務管理もコンピュータで行い、農場のエネルギー供給から、栽培、出荷までをすべて一か所でコントロールしています。

そこで、オランダの事例を参考に、日本の実情に合った先進的なシステムの構築を目指し、各地で次世代施設園芸のプロジェクトがスタートしました。

「生産者の所得向上」と
 「新たな雇用機会の創出」に期待

次世代施設園芸のプロジェクトでは、国内の施設園芸を発展させるために、さまざまな取り組みを行っています。たとえば施設を集約して、大

型化し、出荷センターを併設することで、出荷の効率化と流通コストの削減を図ります。また、植物工場を利用してクリーンな苗を安定的に供給します。さらに年々値上がりしている重油や灯油などに代わり、地域で賄える木質バイオマスなどを積極的に導入し、化石燃料依存からの脱却も目指します。

農作物の栽培管理では、高度なコンピュータ制御により、施設内を最適な環境に管理することで、年間を通じ計画的で安定した生産と面積当たりの収量増加を図ります。

これらにより、生産者の所得の向上や、地域の新たな雇用の機会を生み出すことが、期待されています。

現在、全国9か所で民間企業、生産者、地方自治体、研究機関などが連携をして、拠点整備を進めています。

さらに生産コスト削減のための新たな技術実証や、有利販売に向けた取り組みなどが行われており、将来の施設園芸のモデルとして期待が高まっています。

次世代施設園芸拠点のイメージ

